

開創20周年祝い法要

——もう少し頑張ろう——

黒田住職がお礼

横浜市港南区日野町の曹洞宗善光寺（黒田武志住職）で開創二十周年記念法要並びに式典が五月二十四日午後二時から、大雄山最乗寺の余語翠巖山主を導師に迎えて挙行された。法要に先だつて駒沢女子短期大学の東隆眞学監による記念講演が行なわれ、「釈迦殿」は檀信徒や有縁の僧俗で埋まった。

当日は緑の風かおる好天に恵まれた。午後一時からの記念講演で東学監は、仏教精神に基づく女子教育にたずさわる者の立場から、女性、

とくに母親の偉大な教育の力などについて話した。

東学監は「父親は客観的・知的に子供を見るが、母親は主観的・情的に子供を見る。しかし、その母親がいなければ子供は育たない」と母親の無償の愛の尊さを例を挙げて説いた。

大本山永平寺六十七世の北野元峰禅師は貧しい農家に生まれ、幼くして寺にあずけられた。禅師の母は、「これからは仏さまの子供だから、辛くても家へ帰ってはいけない。でも、おまえ

が悪いことをしたり、世間から相手にされなくなった時はいつでも帰っておいで」と諭した。

北野禅師は約束を守り通し、やがてその高い徳を崇められる僧となつてから母の危篤の報に接しても、すぐには母のもとへは帰らなかつた。

臨終の枕元によくやく駆けつけた禅師は、母の耳もとにそれと告げると、瞬間、母は目を開き「私は一日たりともおまえのことを忘れなかつた」と言つて目を閉じたという。「母親のこのひとことが子供を育てるのです」と東学監は語つた。

また、大本山総持寺を開いた太祖瑩山禅師の母は観音祈願により、高齢で禅師を生んだ。のちに瑩山禅師は能登に総持寺を開き、山門建立を発願して、その中に観音、地藏の放光菩薩二体を安置することを願つた。放光菩薩は安産の靈験あらたかな仏さまである。母の禅師に対する祈りが、山門にこめられている。しかし、実

際に山門が完成したのは禅師の没後八十三年目、二十七世石屋真梁禅師の代。やつとその偉容をあらわしたのである。いま大本山総持寺祖院の山門は、総ケヤキの重層の楼門で、一人の尼僧が寄進勧募の中心だつた。明治三十一年に一山が全焼したので、これを再建するべく立ちあがったのが、山崎心英という尼僧さんであつた。

その後、明治の末、総持寺は、横浜市鶴見の現在地に移転した。昭和四十四年、鉄筋コンクリート造りでは日本一の山門が現在の総持寺に完成した。日本一の山林王・木原豊次郎(法名・崇雲)氏の一寄進によるもので、木原氏は亡き妻の遺言と供養のためにこれを寄進したという。——東学監はこのように女性の力の偉大さを強調した。

引き続き記念法要が余語大雄山主の導師により厳修され、教区・法類・法友寺院、善光寺

海外留学僧派遣育英会の役員、留学僧、檀信徒ら多数が随喜参列した。

法要後、余語山主が垂示し、「本日、導師を勤めさせていただいたのは、本山で共に修行した御縁によるものと思う。その頃から忙しい人で、じつとしていなかった。これは一生なおらないだろう。二十年といえば成人式だ。法を聴かせてもらう場所が出来るのは、死んだ人のお蔭であり、そういう場にお互いが相い逢うことを喜ばなければいけない。仏さまにお花を捧げるのは仏さまの姿だ。そこに仏さまからのめぐらしが現われている。道元禪師に、本来の面目と題する『春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえてすずしかりけり』の有名な歌がある。お寺へ詣つたら、そういう姿を感得してください」とユーモアをまじえて話した。

記念式典では、初めに開基家の村岡有尚氏が「人間でいえば成人というところが、周囲の

寺が三百年、五百年の伝統に立っていることを思えば、二十年はほんの一瞬の経過でしかない。にも抱わらず今日すでに二千有余の檀信徒を擁し、また留学僧を海外に派遣するという、一宗を挙げてでも実行困難な大事業を独自で実施していることはまさに驚異というべきで、黒田方丈の卓抜な実践力には敬服のほかない。そして、黒田方丈が思う存分に腕を振るうことが出来るよう協力を惜しまない檀信徒の皆様が心から感謝する」と祝辞を述べた。

この後、本寺の栃木県大田原市・光真寺住職黒田俊雄師、檀徒総代の伊藤喜三郎氏が祝意を込めて謝辞を述べ、最後に黒田住職が「一つの節目を迎えて、さあもう少し頑張ろうと思っっている」とお礼の言葉を述べて、なごやかな祝宴に移った。

(中外日報より転載)

善光寺開創20周年 記念法要



上・香り高いお茶が供えられる
左・釈迦殿を埋めた檀信徒の方々



上・大雄山最乗寺余語翠巖老師を大導師
として記念法要が営まれた
右・お礼を述べる黒田住職夫妻

法要後、垂示される余語老師



本寺光真寺住職黒田俊雄師と母堂



龍光寺・佐藤俊明師

記念講演が東隆真駒沢女子短期大学学監によって
行われた



檀徒を代表して謝辞を述べる開基家



これからが正念場

開創二十周年記念の事業及び行事、初中後何の魔障もなく、首尾よく無事円成いたしました。これひとえに檀信徒の皆様の大なる協賛の賜物で、厚く厚く御礼申し上げます。私はいま感謝の念に包まれて、過ぎ来し方をふり返つております。

幼少の頃、母親の膝に抱かれて、「昔、昔、あつたけど……」ではじまる昔話に胸をときめかした思い出はごなたもお持ちのことでありましょう。十年一昔といえますから、昔、昔、となると二十年。二十年ともなれば世の中は想像できないほど変わるので、昔、昔、ではじまる昔話は異次元の世界の出来事のように興味深く耳にひびくのです。

二十年前、アメリカから無一物で帰ってきたばかりの私は、すでに人手に渡っている小庵を譲り受け、宗教法人「善光寺」の設立に着手しましたことは前にも書きましたが、その当時のことは、ご存

知らないお方にはとても想像できないことでありましょう。善光寺はいまようやく昔話のできる寺に成長しました。

そしてその間、二十年の歩みは、檀信徒の皆様方の理解ある御協力により、さいわいにして大過のないものとなつたというよりは、いささかなりとも世に貢献できるものであつたことを自負し、無上の喜びとし、感謝しているものであります。

開創二十年を迎えた今年はまだ、比叡山延暦寺の山田天台座主の警咳に接する光栄に浴し、さらには立正佼成会の庭野日敬会長先生と親しく対談する機会を得るなど、善光寺はいよいよ世の注目を受けるようになりました。

善光寺は二十年、そして私は齡五十、天命を知る年齢に達しました。天命を知るとは、天から与えられた使命を知ることであり、人事を尽くして天命を待つ心の境に達するのが五十歳ということですから、これからがいよいよ天命の重きを深く深く心に刻み、さらに一段の精進を誓うものであります。何卒倍旧の御支援をお願い致します。

合掌